

国公立大学二次試験

2月25日(水)は国公立大学二次試験が行われた(大学によっては26日まで)。3年生は1月17日(土)～18日(日)の大学入学共通テストを終え、多くの受験生が次のステップである二次試験に向けて本格的に準備を進めてきた。二次対策として、過去問演習や弱点克服に力を入れ、科目ごとに戦略を立てて学習を重ねてきた生徒も少なくない。放課後や休日にも、学習室やセミナー室5、選択教室等で黙々と問題に取り組む姿が見られた。多くの生徒が二次試験独特の緊張感の中で集中力を発揮し、全力を尽くしたことだろう。実際に受験してみても、一日一日の積み重ねが合格への大きな一歩となることを実感した生徒も多かったのではないだろうか。

2年生や1年生にとっては、これから自身も通る道である。先輩方の取り組みを学び、先生方のアドバイスに耳を傾け、自身の1年後、2年後に今から備えてほしい。

私立大学入学試験

私立大学の入学試験は2月上旬にその多くが実施され、3年生がそれぞれの進路実現に向けて挑戦を終えた。早い時期から志望理由書の作成や面接練習、過去問題の演習に取り組み、本番では緊張の中にもこれまでの努力を発揮する姿が見られた。昨今の入試を振り返ると、基礎学力の定着に加え、自分の考えを表現する力の重要性が浮き彫りになってきている。今回の経験や反省点は、これから受験生となる2年生にとって貴重な学びとなるはずだ。先輩たちの歩みを「道しるべ」に、早めの目標設定と日々の積み重ねを大切に、自身の挑戦へとつなげてほしい。

入試対策

国公立大学二次試験および私立大学入学試験は大学ごとに出題傾向が大きく異なり、記述式問題や論述問題、小論文、面接など、多面的に力が問われる。対策の第一歩は志望校の過去問題を分析し、出題形式や配点、時間配分を把握することである。直近数年分に取り組み、本番を意識した演習を重ねることが求められる。

学科試験では、答案作成力の向上が不可欠である。特に記述問題では、採点基準を意識し「問われていること」に正確に答えることを意識した練習が必要になる。積極的に先生方に添削指導を依頼し、減点理由を分析して書き直すことで得点力が高まるといえる。

小論文対策では、志望学部に関連する社会問題や専門分野の基礎知識を整理し、自分の意見を論理的に述べる練習を行ってほしい。序論・本論・結論の構成を意識し、具体例を交えて説得力のある文章を書くことが重要である。一般論に対して自身の考えを明確に述べていくことを心がけてほしい。また、時間内にまとめることを意識しなくては、本番に向けた対策にはならないので注意したいところである。

面接対策では、志望理由や将来の目標を明確にし、自身の言葉で伝えられるよう準備しておくことが大切である。想定質問への回答を丸暗記するのではなく、考えの軸を整理し、落ち着いて受け答えする姿勢を身につけていきたい。入退室の所作や表情、声の大きさなど基本的なマナーも確認しなくてはならない。

いずれにおいても、限られた時間の中では、計画的かつ戦略的な学習が求められる。進路指導部をはじめとして、さまざまな先生方に相談し、不安を抱え込まず、周囲の支えを活用しながら、自信を持って本番に臨むことができる力を身につけてほしい。

学習室の利用

進路通信第2号で、進路棟1Fの学習室の利用状況を伝えた。本校の学習室は、落ち着いた環境の中で集中して勉強に取り組むことができる貴重なスペースである。自宅ではなかなか集中できない人や、放課後にもうひと頑張りしたい人にとって、学習室は心強い味方となる。静かな空間で机に向かうことで、自然と学習の質も高まっていくのである。

弘前中央高校の学習室に設置されている「赤本」は受験生にとって必要不可欠なものである。大学別の過去問がそろっており、国公立大学・私立大学を問わず、多くの志望校に対応している。実際の入試問題に触れることで、出題傾向や時間配分を体感でき、日々の学習をより実践的なものにすることができる。赤本は“本番を知る”ための最良の教材であるといえる。また、友人が努力する姿を見ることも大きな刺激となる。互いに切磋琢磨できる環境が整っているのも学習室の魅力である。受験を迎える高校生にとって、早い段階から過去問に触れることは目標意識を高める良い機会となるはずである。

放課後の時間を有効に使い、自分の可能性を広げるために、ぜひ学習室を積極的に利用してほしい。日々の積み重ねが、確かな力へとつながっていくのである。

周利槃特の話

周利槃特(しゅりはんどく)の話は、「才能がなくても、やり方次第で大きく成長できる」ということを教えてくれる仏教のエピソードである。

周利槃特は釈迦の弟子の一人であった。しかし、優秀な多くの弟子たちと違い、彼は物覚えが悪く、お経の一つも覚えることもできなかったと伝えられている。周りの仲間が次々と教えを理解していく中で、彼は自信をなくし、釈迦に対して自身を破門してほしいと告げる。その周利槃特に釈迦は「掃除をしなさい」とだけ教えたのである。そして「ちりを払い、あかを除かん」という短い言葉を唱えながら、ひたすら掃除を続けるように言ったのである。周利槃特は来る日も来る日も、ただ黙々と掃除を続けた。最初は意味も分からずにやっていたが、続けるうちに「ちりやあかをとり除くことは、自分の心のよごれを取り除くことと同じだ」と気づく。こうして周利槃特は、掃除という単純な行いを徹底する中で、ついに悟りを開いたといわれている。

この話は、私たちの勉強にも通じるものがある。高校生になると、難しい応用問題や入試レベルの問題に目が向きがちになる。しかし、本当に大切なのは「基礎」を徹底することである。英単語を毎日覚える、数学の公式を正確に使えるようにする、漢字や基本事項を確実に身につける。こうした一見地味な作業こそが、学力の土台となっていくのである。

掃除も勉強も、どちらも特別な才能は必要ない。大事なのは「簡単なことを、意味を考えながら、毎日続けること」である。周利槃特が掃除を通して心を磨いたように、私たちも基礎学力を徹底して磨くことで、自分の可能性を大きく広げることができるのである。

派手な近道はなくても、目の前の一つひとつを丁寧に積み重ねる。その積み重ねが、やがて大きな成果や自信につながっていく。周利槃特の話は「基礎を徹底することの力」を、今の私たちにも教えてくれているのである。

